

海國兵談第十二卷 (現代語訳)

籠城並守具

籠城は先ず、大将たる者が覚悟を極めなければならぬ。元来籠城の趣意は、大敵が我が国に押寄せてきても、味方が小勢であり対応できないので、地形を人数(兵力)の代わりに用い、引き籠って居ながら敵を謀ることである。又、大敵ではなくても、度々の戦を仕損じて籠城に及ぶこともある。さて籠城はよく守って、城を破られないのを主とすることではあるが、守りだけに拘泥すれば、いつも受動に陥ってあえなく攻め落とされるものである。こうしたことから兵法を知る者の籠城は、あるいは城中から夜討を仕掛け、又は敵の油断を見抜いて不意に突っ掛かり、あるいは流言飛語により寄手(よせて)(＝城を攻める側)に猜疑心を起こさせなどして、城中が主動となり、敵を受動に陥らせるような術である。これが良将の籠城である。

○籠城における大将の覚悟と云うのは、必死の覚悟を極めることである。始めに云ったように、大敵に囲まれるか、又は度々戦を仕損じ、精力尽きて籠城に及ぶのであるから、運を開くことは覚束(おぼつか)ないことではあれども、よく必死の覚悟を極め、よく守攻の術を熟知して守りだけに陥ることなく、よく臨機応変して敵を謀るならば、寄手を追い崩して、運を開くこともあり得る。もつとも大将に必死の覚悟が極まっていなければ、籠城も無益なことになる。面を掻(か)き撫(な)でて降伏を乞え。

○籠城の時、番頭以上の高位にある諸士で、必死の覚悟を極めることができない者については、実議評定と云って、上級者が寄合って思うところを包み隠さず評議して、いよいよ必死の覚悟を極められない者には、誠心により落ち延びさせるようにせよ。

しかしながら、それだけの徳も無いのに妄りに仁愛があるかのようなことをすれば、その虚に乗じて勇敢の士も臆病心を生じ、皆が落ち延びたくなることもあるだろう。そうであるから必死の覚悟ができない者を斬捨てにして、上級者たちの心気を引き締めることも時には必要である。こうしたことは、大将が徳か不徳か、賢明か暗愚かによるのである。さて普通の軍士、または陪卒等で必死を決心できない者については、五人組からその理由を報告させて落ち延びさせよ。ただし、罵り辱^{のし}めて恨みを抱かせてはならない。これまでの働きへの感謝の言葉を与え、あるいは運が開けたならば帰参せよなどと云い含めておけ。このようにすれば、その人は城を出ても恥の心があるので、城中に対して裏切ることはないものだと云われる。

○籠城は人の和が第一である。地の利も人の和に如かずと云って、どれほど要害にある優れた城に籠ろうとも、上下が不和であれば内から破れを生じるので、持ち堪えることは決してできないのである。さて不和とは、疑ってはならない人を疑い、罰してはならない者を罰し、与えてはならないのに与え、与えるべきなのに与えず、賞すべきなのに賞せず、賞してはならないのに賞するといった類である。これらのことがあれば、下級者は上級者を怨むことになる。下級者が上級者を怨めば、諸士にふて心が根付いて、何事にも精魂込めるといふことがなくなる。精魂込めることがないので、守備の戦闘もおろそかになって、敵にも破られ、又内乱をも生じるのである。このゆえに鉄箱のような堅城に籠っても、人の和を失った大将はたちまち踏み落とされるものと知れ。そうであるから、籠城で第一に準備すべきものは人の和であると、古の名将たちも言っていたのである。さて、人の和と云うものに世人の心得違いがある。まず和と云えば上級者の人柄がわけもなく柔和にして罵り叱る声も無く、この部下

に小さな恩恵を与え、あの部下に小さな憐れみを加え、又下級者も何のいわれも無く上級者を親しみ悦び、その上に朋輩・同僚までも異口同音に睦まじさだけを和と心得るのである。和であると言えば和であるが、爺、婆じじ ばばの和であって、城主の和とは別種である。そこで城主の和と云うのは、軍士がことごとく智仁勇の意味するものを十分に理解し、法を守り果敢を旨とし、人々皆勇にして和す。これこそが武将の和である。爺婆じじばばの和とは天と地ほどの違いがある。

○籠城するにはつばみぎわ一戦をしなければならぬ。その趣意は攻城の巻で云ったように、当面の戦いくさが不利になり、徐々に押し詰められて、籠城に及ぶことが避けられなくなり、無念この上ないが対応することもできず、又面を搔き撫でて降参するのも難しい状況であれば、とにかく引籠ることになるが、未だ城を敵に囲まれていない時点で反撃により蹴散らして、敵を追払うこともあろう。たとい追払えなくても武運が傾いて引籠るのであるから、是非とも名残なごりの一戦と思ひ詰めて、激しい一撃を与えることである。このようにつばみぎわ一戦で戦う要領としては、敵が到着すべき場所を発見して、未だ後勢が到着していないところを討て。次には城近くに押寄せても、未だ陣の隊列を成していないところを討て。次に夜討をせよ。夜討には四つの要領がある。これらは夜討の条に詳述している。この一戦に参加させる人数は、城中でも特に勇敢な者を選んで、短兵急に攻めかかれ。騎兵か歩兵かは、時に臨んでの状況次第である。

○主将の留守には人数も不足するものであるから、不測の事変が起きたならば、十中八九は防戦になると心掛けよ。そうは云えども状況により、早々と人数を出撃させて撃ち払うこともある。これらは留守城代の戦略いかによる。

○日本諸流の籠城では多くの場合、城下の商家、又は近村の住民から穀物、絹、塩、

味噌並びに薪の材料、あるいは鋤・鍬くわ すきの類まで、ことごとく城中に取り入れて、やがて運が開けて城を守ることができれば、必ず倍にして返すとの約束を定めると云う。このようなことは自ら民心を離反させるやり方であり、不出来なことではあれども褒められたことではない。そうは云えども現在も日本式により蓄積の政策に疎いので、このようなことをして兵糧や布・絹、塩、味噌等を用意するのだから、他に穀物、絹、塩、味噌等を蓄えるすべもない。これゆえに政道の沙汰はしばらく差置いて、日本式の籠城では、このようなことを手際よくすることが、籠城で最も優先すべき準備である。楠木正成が近江国の穀物を取り立て、比叡山に預けて置いたこともこの心持である。さて右のような理由から、急に臨んで七転八倒して運び入れるより、積年の心掛けにより継続的に貯えて置くことで、籠城に臨んで騒動することもなく、つばみぎわ蟄つばみぎわ際の一戦も堂々としたものになる。これ又、城主にとって肝要な心掛けである。

○上述したように、城下や近郷から穀物や絹を調達することになっているが、火急の籠城や飢饉があった年の籠城には運び入れるだけの米や穀物も無いであろう。そうであれば、非常時の備えとして事前に蓄積しておくことである。なお米穀を貯えるには、もみ粳もみのまま俵に入れずに直に箱倉に入れて貯えよ。数十年を経ても虫に喰われないものである。六尺（一八一・八cm）四方の箱倉に三十石（約五・四kl）を入れる。勿論、禄に応じて籠ることができる人数をもって計算しておいて、兵糧米を貯えておけ。例えば千人が籠れる見込みがあれば、千人が一年間で食べる量は玄米五千俵、粳にして一万俵である。右の見積りによって最も望ましくは三年分、標準で二年分、少なくとも一年分は貯えよ。齊の田単は二年間城を持ち堪え、出雲の尼子は六年間籠城したのである。これらは人の和と糧食との二つを得ることができたからである。この上なく貴ぶべきことである。

○兵糧については日本でもシナでもその説くところが多いので、新たに説くまでもないが、初学者のために大略を述べる。先ず粿のことは始めに述べたとおりである。その他に粟、稗、ひえ麦及び黍、きび稷、もちこし大豆、あずき小豆を全て貯えよ。又、ほししい糲は良好な兵糧であり、百年を経ても朽ち損じることがない。私は安永年間(西暦一七七二〜一七八一)に万治(一六五八〜一六六一)年製の糲を食べて試したことがある。単にその重量が軽くなるだけであり、味は全く変わっていない。これら以外にもほしし乾肉、ほしうお乾魚、乾菜、木の実等まで貯えておけ。

○塩は大きな瓶びんに入れて貯えれば、一塊ひとかたまりになって百年でも保存できるものである。これも又、万治年製の塩を見たことがある。

○味噌は塩を強くして三年味噌に仕込み、四年目ごとに順繰りに取替えよ。

○城中に粟と渋柿を多く植えよ。粟で勝栗かちぐりを造り、渋柿で釣乾つりほしを造れ。これらも又、飢えを救うことになる。

○粿もみと糲ほししいとは収穫の二百分の一を年々貯えよ。二百分の一は一万石から五十石を貯えることであるから、実に容易なことである。ただしこの程度の貯蓄さえままならぬ程に経済が悪化しているのであれば、所詮、戦などやっても意味がないことである。城など敵人に贈呈して、早々と匹夫に身を転じるのもよかろう。

○籠城中に外の味方から兵糧が送られて来たからといって、むやみに人夫ともに城中に入れてはならない。味方の割符、合印等を照合し、俵の中を点検した後、城中に入らせよ。油断してはならない。楠木正成は甲冑、兵器等を俵にして、敵方の者の真似をして、湯浅定仏の城中(下赤坂城)に運び入れ、それを済まして後に俵の中から兵具を取出して物の具を固め、城中を斬りまわって、その城を落としたという事例も

あるので、十分に注意しておかねばならない。さて又、兵糧を搬入するとき、付入ろうと心掛ける敵がある。その兆候があれば、素早く門外に人を出して、俵の中をよく点検し、真の兵糧であれば速やかに引き入れよ。そうであっても、その人に油断することがあってはならない。短刀により刺して来たならば、その短刀を奪い取れ。その他にも注意すべきことは多々ある。怠ってはならない。

○上述したように兵糧米も多く、人も和し、守りの戦術・戦法も巧みであって数年間も城を落とされないのは、善であると云えば善であるが、ただ持ち堪えるだけでは、善の善とは云い難い。持ち堪える上に、よく謀って寄手を追払ってこそ善の善と云える。しかし、これは至極の妙所である。たとい敵を追払わずとも、二三年も城を持ち堪えることは、中々凡将にできることではない。籠城する将帥は、よくよく考察せよ。

○城門を開いて討って出ようと思うときは、先ず弓矢や鉄砲を発射し、又は石などを落とし掛けて、敵が狼狽するのを見届けてから、脱兎のごとく突いて出よ。ただし、騎兵を出すか、歩兵を出すかは地形と時宜により定めよ。

○籠城は一曲輪単位ひとくるわで討死するものと思ひ定めよ。三の丸から二の丸へ、二の丸から本丸へと次第に引入れるものではない。これが籠城で最も重要な覚悟である。

○境目（＝隣国や敵国との境界線）にある城を敵により囲まれた時は、本城から時日移さず後詰を遣わすことになるが、それまでは必ず持ち堪えることが、境目にある城番の覚悟すべきことである。

○籠城して敵を悩ますには、度々夜討をするのが最も良い。ただし引返して入るべき小口には、迎備むかえそなえを出しておくこと。

○塀裏の人数配分は、先ず塀裏に役所を並べて設け、頭々の旗、馬印等はそれぞれの

役所の前に立てておく。人数組は上述したように、できる限り厳密に定めておき、笠
冑等の合印も省いてはならない。さて人数は塀一間(約一・八m)に三人ずつ配分せよ。
陪卒がいらない人数組であれば、五伍二十五人に塀裏八間(約十四・五m)、百人組一組
に三十二間(約五八・二m)を守らせよ。又、陪卒のいる人数組であれば、一伍五人
を一組として、陪卒の数から計算して塀一間(約一・八m)に三人の割りで、塀裏を渡
せ。もちろん人数に余裕があれば、それがし一間に四人か五人を配分してもよい。ただし、塀
裏に板を立て掛けて、誰々組某々の守り場と書きつけておくこと。陪卒があれば、陪
卒の数も面々の名前の下に書き付けておけ。

右のように塀裏の人数配分を定めておいて、いかなる騒ぎがあろうとも、自己の
持場を立ち去ってはならない。下知なくして立ち去る者は処罰する。

○士卒十人に一人の頭を加えて合計十一人、これを一組の遊軍として、一隊に二〜三
組乃至十組を設けておき、不断に塀裏を見回り、寄手が激しく攻めつつある所に、元
からの人数に加わって防ぐのである。この方法は甚だ便利な人数定めである。

○平時で敵が攻め寄せて来ない時には、陪卒がいらない組では二十五人から三人ずつ
立番(＝立哨)し、陪卒がいる組は一伍の総人数から三人ずつ立番する。ただし陪卒
だけを立番に用いることがあってはならない。五人の主人のうち一人ずつ加わって
勤務せよ。夜間もこれと同じである。ただし夜中は遊軍の中から補助の夜番を出せ。
総じてこの物見立番は甚だ大切な役である。怠ってはならない。

○敵が攻めかかって来ない時でも、塀裏の人数で申合わせて半分は甲冑を装着せよ。
これを怠ってはならない。怠る者は処罰する。

○遊軍も四組あれば、二組ずつ替り番で甲冑を装着せよ。これも怠ってはならない。

○昼夜ともに立番・夜回り（＝巡察）の者が敵の攻撃があると知って、合図の鳴物を鳴らしたならば、本隊の人数、遊軍ともに甲冑を脱いで休んでいる者たちも、急いで物の具で身を固めて、各人の持場にそれぞれ詰めるようにせよ。怠る者は処罰する。

○夜回りには足軽を用いるべきであるが、全ての人数（＝総員）が疲れており、又は軍士が不足しているときは、百姓や町人等から物に動じない老年の者を用いよ。これには三人を一組として、十組も二十組も設けて、東五組、西五組などと定めておき、昼夜連続不断に塀裏を巡回させよ。これらは一曲輪を単位として設けよ。また、この巡察隊は、塀裏に立つ本隊の軍士と相互に監視しあって、怠け^{なま}ないようにさせよ。

○百姓・町人の中から壮健な者を選んで、二十人を一組とし、頭一人を加えてこれを火消役に用いて、（一の丸、二の丸等）一つの丸に二〜三組も設けよ。そうして城中に失火があり、又は敵から火矢等を射ち込まれても、塀裏の本軍士は云うに及ばず、遊軍であっても少しも火の方に拘^{こだわ}ることがあってはならない。自分の持場をさらに念を入れて守れ。さて城中は云うまでもなく、城外であっても火災が発生したならば、それが夜中でも、全ての人数（＝総員）が起きて甲冑を着けよ。

籠城の趣意、又人数配りの要領等は、右に記したことで大概事足りるであろう。これより以下、守法守具（＝守りの戦法・守りの道具）を記す。いずれもさらに工夫を加えよ。

○塀裏の扣^{ひかえばしり}柱^{ぬき}の上の貫^{ぬき}に板を渡して、弓矢・鉄砲を発射し、石を落とすための足代^{あししろ}にせよ。石討ちの役は百姓、町人又は陪卒でこうしたことに慣れている者を用いよ。

○城中の小路という小路に虎落^{もかり}を結んでおき、許可印を持たない者は通行することを禁じる。これは忍びを防ぐ用心である。

○塀裏は一間(約一・八m)に三人で見積れば、飛道具も不足して思うままに発射するのが難しくなる。そこで、激しく寄手を射すくめてやろうと思うときは、塀裏一間に鉄砲三挺、弓二張、矢五十本、玉三十ずつ配っておき、大敵が攻め寄せるときは、塀裏の足代又は狭間から、隙間なく発射してかかれ。敵は甚だひるむことであろう。

○塀裏には武者の守る所もあり、足軽の守る所もあり、又百姓や町人等の守る所もある。人数の多寡は、城の大小と大将の方略とにあるのだ。

籠城に用意すべき品々

○塀裏に六〜七百日(匁)(約二・三〜二・六kg)から、四〜五貫目(十五〜約十八・八kg)までの石をおびただしく積んで置け。大石は落とし掛けて近寄る者をひしぎ、小石は石弾いしはじきにより投擲して敵を悩ませろ。

○砂石を多く積んで置いて、近寄る者に炒いって熱くしたものを投げつけろ。

○汚水や糞尿を溜めておき、沸かして敵に注ぎかけろ。

○乾土と灰とをかき混ぜて貯えておけ。近寄る者に振るいかければ、目鼻に入って難儀することになる。

○塀裏に五十目(一八七・五kg)、百目(三七五匁)の大きな大砲を設置して、敵の大將を狙い撃ちにせよ。その砲の長さは八〜九尺(約二・四〜二・七m)になるだろう。

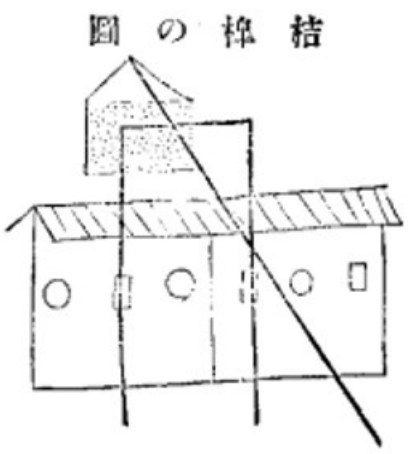
○門、櫓、その他の諸役所及び倉庫の近辺には水槽、水桶等、又は溜池等を設けて、水を貯えておけ。火矢、失火等への用心である。

○藁わらを竿さおの先に結び付けて、火を消す道具に用いよ。

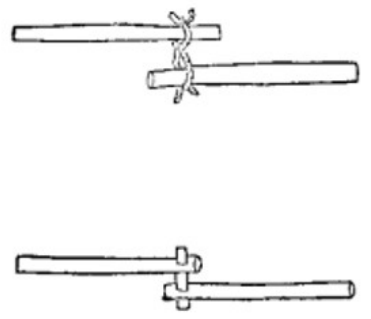
○龍吐水りゅうどすい(火消しの道具)、水弾みずはじきの類を用意しておけ。又古い椀わんをできるだけ多く貯えておけ。水をすくって物に投掛けるのに、他の器物より一段と役立つものである。

○塀裏には、折目々々毎に大材木三十本、小材木百本、大板三〜四十枚、小板二〜三百枚、竹千本、土俵二百俵、縄千尋（一尋 \parallel 五尺又は六尺、千尋 \parallel 一五一五m又は一八一六m）、大釘一万本、錐五十本、鉄鎚五十、鋤鍬五十挺ずつ、鑿、鋸、斧、大槌等、ことごとく用意しておくこと。塀や石垣等を打破られた時、応急の普請（補修工事）に用いるためである。

○厚綿の蒲団のような物、又は藁筵の類、横六〜七尺（約一・八〜二・一m）、長さ五尺（約一・五m）余にこしらえ、塀の上から四〜五尺（約一・二〜一・五m）向こうに桔槔木に吊るして指し出して矢や鉄砲弾から防ぎ、その身は塀の上から乗出して、塀、石垣等の際に寄付く敵を討て。桔槔木の図は左のとおりである。



○石を弾く道具がある。第一巻水戦の条にその図を出している。又、山城では大石を転がすことがある。又オランダ式に手自石を擲つことがある。又クルリを用いて塀や石垣に張り付いた人を打ち殴ることがある。両方の図を左に紹介する。



くるりの圖
或はふり打とも言ふ

阿蘭陀人石擲替古、圖



右は守具の概略である。なお『武備志』『兵衡』『鈴録』『ゲレイキスブック』等を読み合わせて、新たな物を製作せよ。

○籠城の時、城下近郷の民屋をことごとく焼払い、また攻具として使える材木や鋤・鍬の類であれば、ことごとく城中に取り入れ、さらに井戸の中に汚物・毒物等を投入れて、寄手に事欠かせることもあるのだ。異国では、これを清野と云う。

○異国に堡と云って、城外六〜七里（約二三・六〜二七・五km）ただし日本の道であるの所に陣屋

溝を設けておき、籠城の時、城外の人民の隠れ場所とすることがある。面白い方法であるが、日本の気象では実行困難と思われるので、詳しいことは記さない。そうは云えども志があるならば、漸次に築くのも失政と云うわけではない。考察すべし。

○国中に国主の倉庫こめぐら、又は大社、大寺等があるものだ。平素から意識して普請（築城

工事)を加えておくことで、戦が起きたならば出張りの要害とせよ。

右に述べてきたことで籠城の準備は概ね事足りるだろう。なお和漢名将の籠城の方略について見聞を広め、創意工夫せよ。さて又、これにも増して重要な心得がある。全て籠城に及ぶか、又は度々戦を仕損じれば、将士ともに心気が鬱屈し晴れないものである。心気が晴れ晴れとしなければ、戦は云うに及ばず、普請、防術等まで果々しくはかばかなり難いものであるから、将たる者はこの所を十分に理解して、自身は言うに及ばず、士卒諸軍に至るまで、力を落とさぬよう配慮して扱うことが、兵士を率いる人の機転・器量なのである。漢の高祖は、項羽と七十三回も戦をし、その内七十二回負けて、七十三度目に項羽を滅ぼしたのである。そうでありながら、七十二回の負けに対して、八ケ年の間、少しも落胆したことが無く、終には飛龍の業を成就したのであった。又、義経が没落して奥州に下る道すがら、主従ともに鬱々として気力も脱落していたのであるが、ただ弁慶だけが時々狂言を発して人を笑わせ、又は若輩者のように口論を仕出して人気を引立てる等して、危うき道中を難なく奥州まで到着したのであった。これこそが弁慶の智慧ちえなのであり、大切なところを十分理解していたので、このように狂言狂行を為したのである。通り一遍の勇僧に過ぎないなどと思ってはならない。貴ぶべし。